



6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19



袖珍松附合歌仙文部卷三		古終金點也	
目錄		印	
鳥の色	一卷	拾 遠	二卷
百 鳴	二丁	密指色	一卷
星合集	三丁	拾 遺	二卷
伊達夜	四丁	印の字	一卷
貸表紙	六丁	壬生山家	一卷
松實集	七丁	赤茶記	一卷
夕歌音	八丁	舌栗	一卷
冬書扇	九丁	拾 遺	二卷
雪の花	十丁	三月見	三丁
孟子掛	十一丁	拾 遣	七卷
角袖引	十二丁	さつとく	一卷
物の歌	十三丁	拾 遣	四丁
一ツ 橋	十五丁	拾 遣	二卷

160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2 3 4 5 6 7

きはる 本節考を

秋を終んじや四季す  
さとうちをも授えよる

身端もおゆめ火新事で

おととゆうへら廢

降す。花宣まみ祭の轍

おれ船うちあく船舟を

乗す。花宣まみ祭の轍

おれ船うちあく船舟を

## 百物

掌や解不盡する様の先  
日ハ未あリ且あてか  
やふ只氣とんぞうけて  
ちくらむす第おうり  
じく移身移上席で移  
心もばねは毎の秋の爲  
シテ是師のものか  
をまわす方す。私に付  
くらんと書す。わをまわす  
風あられの法が承就  
二三年たつて變れまく  
變とてやへん。あす教  
ゆゑより體付さん。右  
機き。強き角力取は第  
何の因りや。左の道は  
おのの單けや。シムカ  
御供ふ者。座外もあん  
ふいはし。おのの龜入

<sup>ニヲ</sup>かうる年半が例すあり  
手紙をおそく。其事。手紙  
を経て。其の。手紙  
金を贈りて。彼と。みゆ  
ねせすんと。おどける  
おどす。おどす。おどす。お  
ひどす。おひどす。おひどす。  
小酒市。の。おひどす。おひ  
どす。おひどす。おひどす。  
むひどす。おひどす。おひ  
どす。おひどす。おひどす。  
あれ枝。おひどす。おひどす。  
おひどす。おひどす。おひ  
どす。おひどす。おひどす。  
きりしと。おひどす。おひどす。  
おひどす。おひどす。おひ  
どす。おひどす。おひどす。

墨含集

卷之三

牛乳豆生せむきとう駄馬  
ト梅代アト蒲萄板也。隨連  
はまううきぬく原有也。而  
處す四キモミハルマリ  
くれ拂く。並あして。清林  
達の木葉落葉。もろ  
後拂も。さざれく爲つまえ。秀  
才。持りけ。寒とせつむよ  
体も。も。猿。ひの。都。よく  
海くも。廣。れ。隣。つ。金。也  
か。手。め。くら。お。波。と。も。引  
月。も。や。あり。の。森。の。ト。枝  
射。走。え。又。ま。き。う。若。子。け  
彦。派。た。く。傳。考。れ。内  
か。あ。れ。か。せ。も。う。と。審。れ  
翁。子。は。う。見。て。ほ。世。さ。り。り  
細。字。く。じ。聲。を。若。き  
叶

人ふた陸にふを渡り  
彦舟すらかろき 俄  
うひ事と身と浮く時  
泊實寄れうきみと  
波み減除ひゆるま  
擣けむとむうへば  
手もとと森山より御使  
ゆるの傳代古教お出で  
あめめやうわふ下  
ちうくひきくらうひき  
ゆうきびてあめめあめ  
あくらうひきのひく  
自らあくらうひきのひく  
する龜のひく正守  
すよおねん生ふがさ  
はあけせぬもひやせり  
營れあさん拂とくまで  
柳の木のたまつてそく

## 伴達友

物語れ我席主立代子哉  
あわうよもアリキ  
ねの席主他はあえぬれそ  
おハラキアツ猪の猪掛  
いとす用を重くゆけり  
さうとてあ寄れ秋  
翁よりあはれでよ西東  
地づらうめう付のねの  
五角まく小袖の猪の猪掛  
候うる數をとせばへつ  
められをみてやにき  
やまく常くまみせやにき  
言をまじらん猪の猪掛  
手あひく日約つとも  
物のあすえに及を吹く  
相れどうたうを後のお  
挂なみゆくいへ月と空  
活のかすこ不二と勧争

山良葉

あよひて波千歌の歌  
大よ歌ふあらひよしむ  
猪の歌を歌ふ喜びぬきそ  
おとおを吹く種つきの書  
りえり達ひよすすす月秋  
うて歌せそ是れ聲の歌  
山角まきくく声の歌の歌  
正あつまう若陰比少食  
詠歌とが喜び答へぬせひ  
あみか更章と謂うて  
猪の歌を歌ふ月秋  
あひ生産と併せて  
猪の歌を歌ふ月秋  
一門の歌と併せて  
夏あつまう猪の歌の歌

山良葉 韻山良葉 韵山良葉 韵山良葉

作達者 お前

かくれあやめのぬまを野の栗  
ぬま江やうたをうるさむ立草  
立草す山の井はぬるみれて 等霜  
時つゝひすゝふの棚橋 有言  
あそびたまゆる月とこのまづ  
いもいの枝のまゆりき 有言  
秋ありぬう縛り茎をひす  
ウ 植ら矣の抱たるを抱らせて  
野牛を獲るあうきの有  
松歯取玉の端より多  
種此を脂をつぶす  
年へんの脂玉をすくうき  
されて運れる傾搖北  
食へきを詰めうらね  
年へんの端をすくせめうらね  
神では魚つり舟を運す  
笠木端をすくせめうらね  
橋へて船を運ぶる船  
茅葺の船の船頭がく

名 寒 菊 雪 羊 蒙 窮 亂 菊

二十九  
あらやとよをとすを夢  
水ゆきされぬ裏髪ふき  
まき細どくらむきはせぐく  
かくへ琴竹擦やまとたき  
うえ林は葉まくらき而御茶  
折とかくの布代生 醉  
り便に社ろ流とて見  
家食まくらぬ六つの持  
仰ふるる島縣の館をまく  
四五日間をくらむ寝る  
色付くなど重むむわむ  
花代生絶て家せぬ 村  
冠すし後すそくはてほれ  
二つある浦へとくわすく  
ゑまれひきくうとくとく  
まむせきせり要ふねりと  
入り口四門と法弓む山  
波とあをとむる道すの福

袋表代震あらば萬年  
風流れりも更の因極うる  
度益子とおて我すも子  
あせきをとぞ拂ひておすん  
翁  
翁上鮫は帝いとすがり  
一承して身ニ童のま川柳  
日度<sup>ト</sup>を招く材え枚をす  
ウ能の女ら上忍をひつ度を  
世をうれしやとすも安め  
或時を被子とすめらん  
撃打少枝と悪を傷く  
うらみの娘う痴れを怪し  
をあする山や白髪始む升  
ほ盡の軍をほくま事で  
秋をもとめとゆきと修  
文す秋の壁突破る若の角  
ぬの御伽のほくせも月  
うらじ代形をセユ御す皆て  
かわきよと繋く奈井

シテ尾<sup>ト</sup>おくよやむすん  
前始<sup>ト</sup>うづきみつてく  
新ひきふすらけ経て  
おれく武士<sup>ト</sup>あくらう向  
葉とくめおもへゑはせす今す  
きく方<sup>ト</sup>うききふかく  
手松<sup>ト</sup>ゆき<sup>ト</sup>腕をひくと  
ひやうすれはらぬセタ  
経うる扇のね乃月をそ  
すきゆうじ六宗の發  
切接枝<sup>ト</sup>うるべてふ櫻浦  
方<sup>ト</sup>山はくはせすもあく  
拂<sup>ト</sup>やゆすもくくう寝  
ほれまよしの研<sup>ト</sup>もん風  
六年はほそ人の體うれ  
をのきよがくか袖をす

拾遺集

みちとゆき誰をもさと

白波アリ芦静なり

中汲の碑も又は持持て

身の便不當持て

愁吹ハ枝は寒そやまうが

枝は枝は身せざり

蘆テノ神にあき日の福り

思ひもかくあらうの時

ほゆて土若カアヌサ

まよひすと通食を引

門ヒエの溝止死

道踏めとうほと詠詠

山陰等手経スヤシモ

柔也あらき火のま井

名舟キ牛は橋とす

と余ハ木羊首負崎と

至事我名ハ仏法在

あらうめ三輪のノ高

峰東南峰東南峰東南峰東南峰東南

カタチ木底玉機空木機おで  
たれ木ユ萬蒲おで  
き木ノ振ハ後の物サム  
立れありとどくや道相  
珠代の國も幸すくの候て  
英濃ハ伊近て幸き繁  
夕月又高輪と下すの多  
婚ナオすすき貨は出人  
麦役ユ寒りぬ飯をとむそ  
速利リモリ川舟れ袖  
怪する風もすき中少難  
めとれとくを失密安  
人用よろとくを失密安  
猿ア日出ア左をきくも  
嘗ハ此の子不いと山峰  
峯上地とぞれ奥行

夕歌  
古之教民

卷之三

身をもててあひるを  
底代柿の葉うなぎと  
翁の肩ぬる寅の日課を書く  
ああ度代古き技枯案  
尾附めたうつませ不細  
百都りる川れも上  
寂寢と氣も人情も無心  
もの墨もと筆也抹さざ  
一ひろすてあすかせ  
送かる子れ飯つむじや  
いそうとさかりゆる臂  
折と破れていた  
1宿  
月はあぢくて赤小豆の若  
桔梗うわやわらか  
絆散髪へ黄赤ユ秋色  
大工代役と引くほさ  
之の猿床やくす葉書  
ハツトキモアキ碑

原角を白根とやれどもうて  
うちのふくよそくひ衿を  
あんの纏まきへるも浮辞  
やくちやかちやしのぬ  
蒜のますあまつらぬ煙を  
黒きよもとみせの板を  
烟のあくをうそ雲萬  
ちよ車切の盆もようう  
せき蒜に玉葉の葉白の葉を  
すいから細き小れこ日内  
き取の據りのやれへりと  
さくもゆきのむびの夕方れ  
西引火をのひの夕方れ  
小糸ちらしくは連と  
為霜れやて晴れの日空  
あくみうくほる雪菜  
空て粒を入小糸れ  
わけ垣よりうしの蝶

卷之三

九

めりしや草葉のじれぬ草  
清され新とひるみを拂  
御まのまくらくとあく雪捨て 安信  
袖とそねようりすゆふ月  
えやれ春ゆきと秋乃風 自晏  
かえれ花こうれは餘庭 蟬  
ウ思ひぬれひとかよ家達て 許  
あきまづりあきま空 信  
本浦城とく度うめりう 風  
とほん佛のき日ちうく 里  
向やうをもてむだ山ぢに  
放てる野れゆうぐるやあ あ  
素を度ひ無残のえれまを見  
拂うるがれおよびも月  
秋やいづらふもあどや 信  
いろくあくたれな香 風  
おひとす葉さあひる葉  
被ふるるもよはねる

雪化見 烏田の杜  
度重す遠む清む音のをも  
るしくはれきあうき  
村くはれきあうき  
我始論ふれりけろひ  
秋れて存きき風のツツ  
枝うづくらすをきひの壳  
かきくちの殻を打て  
こちくは葉失ひき別力  
めりくは葉ぬをも葉をも  
破ちくはれ殻をも壳  
古御えむくは葉をも葉  
おとふをや取もとくん  
ねのよ飯局ひり取れ風  
えもどりゆくとくに月  
地や暁の夜うゆく  
温をへふえて今すまめ  
はゆれ如き葉の風よたれ  
たは温都とゆきく

雪化見 烏田の杜  
やくしりくはれきあ  
も届く一甲のじゆううきて  
あくしよもつじゆの沙除  
お寒袋をこけて起すり  
物衣をぬくさうもあれ  
解きて旅宿をほど  
收手せなはされあられ  
おゆむねよけよめぎ  
縣北昇の尾月あ月  
秋山の伏林と音を響く  
寝姿寒浦寒菊の文殊て  
雪化見 烏田の杜  
人起をゆくゆく  
そめよぬき染ゆすのを  
も捕れむれはむかむき  
雪化見 烏田の杜  
まの秋す報うれあり

みち掛

生後日月の日

星宿の宿とよよとす  
社とくのす。智代伊大  
坂山れあすれま橋を極り。  
あるふ小橋はまよあひつ。知足  
う橋は春秋をす。月がけとせ  
多せときのせきまきう雪  
一里のさく毎朝の川とす  
初さと見て門そとひる  
市と西とあらへんをゆき  
おそれうみとむきこすを  
叔向はあきとみ櫻見れば  
月とやうとみ櫻見れば  
えとねと申とうけと秋の風  
けりゆゆきとす。夜の橋す  
危作と雪り若れあれと  
歌木をたぐねれと秋  
峰巒と星宿の月を忘れ  
山もあとすとく使け

星 信 風 菩 菩 信 風 星 信 風 菩 菩 信 風

二  
辛根亮はあらぬう。角  
角あく肩を化粧する。霜  
霜雪れ故を嘗て。心の内  
あれぬ愛と松あけ。云  
花ふくと配はの月と烈え  
度とよめつて。かげをす。  
式日日へかとまきて。とく  
波艶葉はあら川に  
探すに頤る。すくと深  
坐りてあら葉大の舟  
舟とあら室はぬのいを  
すきへすむく前神いく  
船方よつまくぬの舟をす  
あるのもあらううと  
民人の在國あきぞれさう  
せき我むれのをとゆれ  
田とくすあらふれをす  
すすと大井津を承す

信 風 菩 菩 信 風 星 信 風 菩 菩 信 風

手を拂ふと暖

京のまくまくやゑやまむ

かきくらは月の海の月

小松あとたまうす袖ひらそ

ほれひまうられの風

淡おとせばるの絃をあわせ

僕はおくれてまゆくたり

うすとぬぐれ鳥鳴ばく

の日めの飯うちだれ

りうち身あもぬ方よみえ

縫いくらみうらう

をああもしろひと笑ひ

ちみととて鄙び猶わ

變らる然の油衣もつく

身玉廢出來て軒の跡に

河邊けたる茶粉と茶の葉

枝すすの力あくとひ

小袖と冠の風をもとめ

こかく猪の子と拂ひ

シテ  
父の軍を起つての夏  
ね陰ノすすめあはれ波打  
翅ノすすめほづはうひ  
あひの船へ船をひき  
云波引ノすすめはうひ  
山ノの車ノ引ノ本ノを  
船ノくらしをすすめはうひ  
波は波ノの波の船ノ風  
波ノくらしをすすめはうひ  
あうむ廻ノまくもあひ  
すすめはうひをすすめはうひ  
陣ノのうち學ノ基ノをつくる者  
音ノを拂りあん時もたけ  
えの聲ノをあつむる聲ノ  
音ノを拂ノくは拂ノ拂ノ

手を拂ふと暖  
京のまくまくやゑやまむ  
かきくらは月の海の月  
小松あとたまうす袖ひらそ  
ほれひまうられの風  
淡おとせばるの絃をあわせ  
僕はおくれてまゆくたり  
うすとぬぐれ鳥鳴ばく  
の日めの飯うちだれ  
りうち身あもぬ方よみえ  
縫いくらみうらう  
をああもしろひと笑ひ  
ちみととて鄙び猶わ  
變らる然の油衣もつく  
身玉廢出來て軒の跡に  
河邊けたる茶粉と茶の葉  
枝すすの力あくとひ  
小袖と冠の風をもとめ  
こかく猪の子と拂ひ

卷之三

二八

三

白鶴別

ラ  
後藤氏やたらに夢をもて 露  
驚うるこみちかゆきを 薙  
捕れ驚き我を集と申御う而  
立つゆす書あれどりづきを  
わくひとあまく身體を 畏  
手とまくもおのれ達  
るをやうて母娘ふくめのあは  
九輪やじまく尾よもみき露  
ぬれも夢の露終はふく達  
ちにきてお庭より拂  
身もよき心れ取らずもまじ露  
ふくらむ唐と浦くらすあは  
一袖れきみのまを拂ふ事 有  
名を紗のをき越比翼ひ 蒼  
面けで経すむうの匂つき達  
は夢とよいか妙るの夢 有  
機械もせられ行きをもぞ 極  
持れものすくつて身 英

時ハ秋ナリれをきり樹のと  
原ととあるあく風をきれ日  
少詠リ外の秋の終の如しき  
武者退つやくすいの多くを角  
等うるをよほどき拂瓦  
勢うきぬあて枝取くを  
傘れ縫とあくから併て  
まくじくアレ神との民  
黒き日比行とあくし猿琴  
持アレアリみうめうたな達  
りをすえ天のむくはまき甚  
多あらゆる絆つりせさく  
愁とうづき食ふ此更臨  
あらゆれをすく風紫  
身着くタヒはふまた殊  
室をつゝふと新洞へるも  
苦はさんくるそぞれを  
歌枝ひうふ山吹の橋

卷之三

卷之三

物の歌 南雲

すまひ神とまやうやうて黒  
をみ立民の伏也狹ひも  
あそびきの音を猶ひて  
あよおうと志拝比も  
かくすす言ふ有比が人  
秋よ寒れどや嘗り哉  
實今に志の蘇羅布を  
里ちくめうされば陵  
押刻くたよんぬう多  
まかくゆき傳れども途  
あら門や麻尾空とくね  
古もたらる荆さむる  
洗濯やとまもり拂葉  
猫のうみをもねり  
上まかみやもありてねが  
せ白化れゆすまわうき  
も無人ともすまはう  
まれぬとよ御の涼やき 邦

## 一ツ 指

近習て七日勢アラ林れ  
憚て檻のりて。袖 指 龍  
足踏本と度ニ御了代へく  
手そ外をもす実せ  
脣と拂へ掠る手すら  
枝アラシき相次來をか  
ウ墨衣スハ中は堺處で  
内外代下向志門うれ至  
股ア立討キナははき  
一ホのちきう鴉うけた  
ね鶴エ放ス人といふに詮  
生て於子代あひあひ  
新之ち智の歎と豊鑑  
ミノ代鑑をサリシホ  
毛をより櫛や搔玉參之そ  
物代シメハモ白ひ等  
毛をそく泥あさみ乍見  
音打麻木也く矢を刺

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

風

角

麻

良

二ツ 習へと空よま東洋アセ  
男のうれ白影ヌメヌ  
孫琴アシの筋難を忘記る  
なまこわく牡丹故つ  
耳うく妹う告くる子娘  
つ舜あま多瀧素屋すく珍  
札幌て刀斗ハ仲人を喜  
橋アミホアヤシく源をて  
京北月映ハ海浦うん  
袖とめく袖の想安アラシ  
眉ぬく袖の想安アラシ  
廊は書すめぬ不ぞうやて  
あどり一富士雪丸山丘  
ほれさひ曾母子村ア波を網  
ほやく身やあぬ浦  
お國の袖五ひりんむとね  
車せやうて差せやうひ

## 拾遺

タラカや夢ニ端どるを浦  
西月をあせく萬の下井  
ちくとは際も海風の空立て  
てはまくわざれりと  
一晝の端てほんの終の月  
御子轉乘よ庭の坡のき  
松草も小僧おねいぢし  
ウお草も小僧おねいぢし  
あくゆもはんこくりと  
其のつまむのにはせ  
旅の駒まで承瓶さへ  
もせりふひも多松陽も  
その馬もくく波もくく  
走きと門うききをせ  
系は味を犯はきとろ編  
舟船は名波の源きぬうと  
考のれくかう和歌の峰鐘  
花れ事は峰め鶴のいくむき  
去はううす草あみの元

二  
波音と風音は夜の風  
伊勢の空ノ静裡先へう  
指は木をすすと風のひそり  
尾も波もぬきまとやく  
指もとを空がて吹く雪骨 高川  
きつくす花きや藤の葉 加行  
就もとやうすとあくく零生 韶  
合古のゆきねやの雪を零 韶  
根茎と花うねくほの花を  
本子抱体く限く若初 川行  
作山ノ心を立てて抱葉清 始川行  
日風竹島も上田の出来  
立の根もひささぎの花の房  
花ううてかへうりり  
陽れぬひは淡然のやまとを  
此月よりは淡る摆 花  
肯うう花よりは淡る摆 花  
くうりぬ花もすうう花

拾遺

夕あはや萬葉の陽ともる多や若  
西日をみせく霞に下ぶ而  
ひくと拂拂玉鏡のさとすく  
ものやうりもれひへあり 所明  
一更北袖て酒うみれノ月  
御玉篠簾とこ庵乃竹あき  
松茸も小竹鶴ねりちまき  
ほくえの木と人まうす  
萬葉のほくまうか原むにて  
旅の號走玉原籠さへ出す  
もれひくへつてひ急に宿らせ  
しのうよへゆがまくも  
めきひと川より急き冬聲  
草の音、あき此里片輪  
月影玉弓との原き霜うそ  
志のわくも酒席の入お  
旅の車上車ぬま共へくも  
古ちねうへすぎふるのあ

二  
湯舟と田舎役者の筋めあす  
伊勢の風玉耕作をもて  
扱はあとすしとやの歌より  
風も詩もめ意をかくす  
うどくと歌うと君とおうり  
豆漬あくら豆の豆の豆  
美しきお野の豆の豆の豆  
合羽ひうくら豆の豆の豆  
路とての後うきひきはあ  
沙毛大波玉たゞぬあ若  
ゆかとあ波入てふきなき  
ねのみくわせきとて  
ふし種の麿とお二人を  
心きいとお波入てふきなき  
聲おととくねれわら波袖  
難波からだの移町されまで  
ゑりおきて柿山次

密柑色 駐止亭の月夜

秋の夜にて魚荷連立 駐止

あの夜も此に亦ねじ花咲て

川ものへせうこのむ中服

川の枝をたる一色のう

滝川よけを參りて見る 青流

灯のともつゝ亭のまき岸

蓋されい続のうとくの夜

坂下てうと一里ほどゑ

照付てすらもあやこはせ葉

村の如アセサ集て轟る

踏とうへ女うりてばと仰

大やううすれ秋の美音

けの美と又ほくす然の月

すきのサへ燈火もひこも

寂かきまくらむゆきの月

おしくてぬま乃旅人

老

（テ）  
ゆくよ渡のまゆもぬひしき  
ちる一見みてえす車邊  
めつきとゆのわゆあるう  
又ゆかへやう御行見るて  
名もどく見えきとて竹有  
竹橋うくる山川の末  
大根す細根すありて秋を  
あれ枝空くとけられやけ  
やうれい廢き六日がむがま  
ま迷船てあり豫みうち  
すすくふ計立ふとゆく  
地のあをち時もつて出で  
壁はゆかせて一羽難  
ありゆきまひく様さきての  
船入とゆう経をす三井の陸  
枯と薪と海山アたく  
人の風す秋すぬる蟹  
咀のむきと桂すうづり

拾遺

喜

は里を山を四面や多霧  
あくまではそく始る岩窟  
いふせきをみる一種のがごと  
波を飛らむれば春は来れ  
雪を  
宿してさきをすゑ月  
宿る暑れ門のりあ  
小地蔵のあよ並拂菴芭  
翁のあれぬ下りの翁く以之  
終焉に拘る小家ては見る  
老翁をへのる九世の親も  
傍人よめてもとす小袖拂  
衣の代もく若の母原  
翁の子代親を馬でひそむ  
きて付する龍の三月  
亥ゆうひろく夢後よゑを  
うつるの翁ハ取つきやう  
花前で朝を二度よりえか  
えどもいとの火舎の白幕

桃裡 考 诛 乃 九 之

<sup>二</sup>湖と岸下よううむすみ  
娘子のあそく晴雪の並拂  
衣とよと幸と草と名草  
ゆのねと與す衣はり  
海かく湯の水代船をさき  
秋の唐あし義和の墓  
菖蒲の荒ゆすれに草と  
小つゝのよくきかくこの月  
さすくの夜の刀身とす實  
乞食とさりてまぬがくと  
さしづける宵かげをと拂い  
されども法とねこ走すら  
<sup>二</sup>素の身ひくねも足らずてゆり  
あとねひあくは生を拂は  
念佛とすめゆる様の立  
まくいく袋の休坐めては

桃裡 水 波 雪 先 備

拾遺

まよの夜ぬけて陣裏うれ 東  
ちくし老る縫の燈火 東  
餘ひく沖ニ一宿ああせ 西  
苗萩ゆめ砂浴け松葉  
ほうけの入日と月の赤み本  
あすかき旅の情子  
み付の心とすまめ神まふ  
テ庵玉つするはてすよ  
里翁て寔へま梅田の丘地  
かる血くさき安の傍の人  
つふ星玉子體やき二階を  
こり小火のもの舟うれしく  
峰巒や樹とよき1月の詩  
まき本東と絶す橋を  
踊場よかつて只吏の二子あ  
あすけしらばの袖とくさく  
冊子代業おめやを苞  
あく木の持のぬけの宣長

今川の威威と氣うる御神  
注でひとすさまの不届き  
迷路えと百もとうれまの神  
舌白け宵とあうかきあ  
町端の候拂うれて火と燃す  
元をマナレモの御父の御車  
月すらの御船と見臺の燈  
内裏の燈よ入へよのま  
萩垣の門とさうじまのま  
墓うもれと秋をあう  
金匱よやうかよの御車  
切の舟と  
船打さりく切の舟と  
切うけ底うへよの店の見  
把て手を拂ふき御の舟と  
舟とまわらする葉隠す  
雪ともゆる御の舟と  
舟とまわらする葉隠す  
舟とまわらする葉隠す  
舟とまわらする葉隠す

卷之三

引  
志

拾遺

拾遺

本日より行か候もさうふる  
ゆきあるべくやううる事  
擇擇をあそはほの時かて  
ありあほひとこうじよけ  
さかうみうき月のそれ  
石壇の縁目もとくらきを  
良よも候る候のみ候本  
あすは多所へやどもかん  
本懲らうれ雪れされ  
妻たとえんとくのちひを  
お戸のとくめうつき切く  
拂一きあ深ニあくと月をか  
ひくうとむてよしとて拂せ  
床てあことくにか尾毛を  
拂くアスラフ松母子うち方  
芳半歲  
あらうせひづれすをうり

日向まかの二日跋

三

テ  
湯をさきうふ掲とひきう  
すけあせびのまきうけ發  
きの板の掲掲高す橋のと  
ひくのきぬと要うつうう  
勝うあもし頬をあすへ廣く  
また新しきまうとまく  
佛佛よつう日うちあいと  
源氏をうつとまへううて  
ひうちまかのまをあきひとま  
薺子橋のうち火のまほうち  
えねとみに経うく秋の空  
あうあせびのまくとまくと  
のうふ二家の弱す控さす  
踊出うへあうねをつと  
娘うむねう後もうれすや  
きいやうトとくおぞりす

## 拾遺

お跡の席よひへん小草  
拾やえうるタキの裏  
り越く枝葉のあくまは  
石ゆきへす飛くの月 曾我  
あまきまつてのれもひ  
大のま近て秋とみゆ  
ぬめと己食せよやせん  
雪ゆめゆく松の移る  
立とある落の木葉は暮  
あのくへよ地と見え  
坐えてよ美女とぞす玉鏡  
紅粉白粉の布のゆゑに  
夷句の秋のう跡せまく  
群よ森てあ波乃月  
蓬草うねのやあきらかに  
あひむきをれあうす  
夷傳うむうほへんを表  
秀す恵あらん死きもの表

二四  
おの徑を足あがくて飛植  
黄うつ入てせはき跡うか  
果は日を樟ユがさきあよ  
今をうき坐を残うとす  
二月十六八月廿九日  
金利植ふは櫟の歎の後  
植鶴のこの樟叶本  
ついとせううにあきて  
父の姑孫と泣ひに至  
うとかすむの逝るかの早  
クアモテ御上石上 良英 良英  
鷺ひの前とお山の上  
鷺ユがさきおのりあす  
けみき鶴をすく猿ユすく  
りつとりきおのりあす  
名とお身は遠やちの樟  
手共知りすきの山す

拾速

涼しきをかねて林すまき  
おれがきりよ叶の草すむ草  
床み立毛上の清め田すうけて  
夕月すう一ニれ毛乃所と素  
捕ひ葉人けどくぬせれ  
勝勝れつ所あらうして大吉  
ウキテ立毛の清いよは遠電  
山を其きて冬ユ血すゆ  
アレ毛の葉や絶母ス傳へ  
秋田酒田の浪すううき  
るともしる寒はかかほれ  
素ふすむれ雷ノ恐れ  
文禮ニ美人のから妻て  
靈すらる日をやせし御  
入日や申酉の方たるが  
乃と放く破る叶の戸  
干船の空てひまくたれて  
去處は立木よ庵寺を守

二十九  
雄鷹と胡蝶に差をかりぬえ  
火車もとへて云はれどゆ  
扇ふくやさーき遠す一あく  
めー被とてひまを被すね  
と経る立木の井掛の太ひ女  
経ある立木は花もむす  
物すきて六位源すういと  
ヨシラ松をせむる松の根  
二三ツの射ぬの袖をひよす  
かきけられてみよし水  
水舟放漏とり風も吹き  
本城の男や義襄をわざれ  
二十九五教の更う秋のあ  
うやかめ立木山の井  
物虫挂す川上の井  
りんの子とよぶは雷ぬき  
おの巻きをゆきぬき  
おの巻きをゆきぬき

## 卯の卒

あふびさんやれ曾がくのまくは  
ちもも枯るまね乃秋子 亨  
波一多羅トモ立候月夜エ 製  
志向一後き草一きえ亭  
酒肴にらる雪に拿さして  
ひそかもしく大手乃梅  
妻めや二日あると嫁の夫  
音ア油沸もりあ  
初恋をみ出すとあらじ  
寺ふつうをかて傍せ草や  
五子葉みて處る山もと  
塗は戸ハ納豆トモひ静ミ  
船あらゆく竹脚きる轂  
勝義すハニキニミを賣  
すせて舟うす月の川端  
船持ぬぞむひゑふうを  
すきの軍比肩ハ白暴

二三  
やか入の宿やまんぐのあ  
ああほひの聲はかころ  
うづき佛と降下し歸りて  
はげくから一閑素の社会  
善行で手の餘裕をうき  
まひくある志望古里  
あくことの餘因の餘裕  
余利を嘗てはの瀆の法  
行ひて刻し老いた忠信あ  
本家の卑萬りふ百姓  
村の周圍まよ赤ざきゆう行  
付ぬ敵乃経圓へうき秋  
あきくじの花紫地紅うみ  
松葉一筋とよけの里人  
猪の鰐茶と云ふ御植

士山家

古井は誰そアヘン　草う鄰  
ゆゆの勝きよロヘシテ御　葉  
指す方小月ひつむめり　百畝  
指すえ隠れ様をかくすん　村被  
森と喰れやああくよ　式之  
ウタヒトヨの手運すね湖　一畠  
モモトアドヒのちまつて　被  
猪小妹うねを上うるを　被  
並さん活ニ二日歴する　被  
古川をうす色ぬでふりく　被  
もてほとおき月代が本高妻　被  
役者すれ庵小本高の高す　被  
曉吹人代からすなまう　被  
猪わら棒のあはへ来て　被  
撒播えびけへ青毛の舞　被  
孫彦孫うちかへすむかの藤　被  
首ももさきにたさすりの條　被

木葉

<sup>二</sup>ラ  
喜び色新す今モ珍れ全直　好  
尾とぞ魚ら本魚不うれき　市  
しゝ魚の笠さぬほくふ鷺立て　被  
喜も子音もつ波ううりて　被  
ゆうされやうれき人の主帰り　被  
波く移る子の歌のきる曾　被  
宿うて木橋ほとへ火と攀れ　被  
御者とタクミ肩葉またも　被  
大樹小舟戸もとと石駄のれ　被  
地居ところかねば下る　被  
み竹木ぬれ里うう文さく　被  
船入るりんと移はるもれく　被  
掛えと小袖のウチか抱つて　被  
之味臨ひきてあしぬ乞食　被  
けふも余あら御恩詫のよ　被  
水干すじ魚の若子　被

東京記 草稿 未完 あり

あはれと柳と鶴と月の序

壁面は水の波も波の葉

山はあれみの緑はやま

木下の木の約はあれて

風はやくよきのやう

峰翠すわ波の水をひき

常をもろひすまへて

孫をさへかくらむ

豆蔚ちうす雪色の水

源庵と枝よかよまく

剥やし葉ふかのひすれ

負軍功者よいてゆく

よそいひ書くよせけの方

見ゆて故郷へ送る

老の難めと歌ふ小畠

一画ア彼岸村の屋まで

日影あめく嶋嶼や暮

ア  
あはれと鶴子をせん弱はゆ  
は医者すすまう仰あきらむ  
鶴を惜みとゆすじ  
桜町アキラ町方入口  
女房よすすみ等はるす  
うみの空囁きやうじ  
文筆と算はるる六ぬき歌  
たれかき風はるる萬葉等  
牛の外よせうす市年  
にぬ枝の向本、陸足  
よつうと桜子を月の輪  
かくと角すと月の輪  
すんと伸る男兒房  
うぢりとゆうと歌のりえ  
業すとあゑを拂ひが強  
えりうすとせうと小妻  
二人りうすせりうじ

## 虚雲 お久映

詠あまんとすとまつ源價

多々湖日ノアテ駕馬難

テ紙き夷ミヌトマギル

ニ猿人代鬼を怪シ

圓に袖ひりもミ脚ひ膝の臺

船もる仲を笑ひう茶込

時山峰峯と舞

毎叶れどもうと葉ふ深さ

物端の冬もあ放さむ

一の船里代駕馬と寝

斬名はまくとひ野を春

財舟船代吳と呼

うに坐すゆひを食の殿

窗ひひ負をし笠ひま儀

色菴あく一地様

くれも流汗たまらばや

鰐こくして御ぬ我孫ぬ月

角角角角角角角角

角角角角角角角角

角角角角角角角角

三  
葦入のまくゆくよすのね

たくいやんて萬よみがい

喰うす方重ハ鑄ニ小紫

馬御馬一やくやう乳

枯蘆斐栗櫻の角を事め虎

魔神を使ふる荒波のぬ

鐵のりどうり種きせう牛

角様又姫もあうりき

ひ多く四輪の承美が也

うつみ火消て拂乃灯

ト可店物と拂乃月と

西瓜と後つてもあにく

喜れへふ支拂時のほと根尾

みそめの夫あしぬふ向

八木井翁のきを告て

詠あむかとすとまつ源價

多々湖日ノアテ駕馬難

卷三

卷之三

二二九

拾遺

老夫子老夫子浪子根子舟 其南

卷之三

こやろきもとまどみぬすを  
百とすう孤と歎とあくをせし  
便端と系の宿不<sup>シ</sup>  
穀<sup>ウ</sup>の酒のきとへうて叫  
意<sup>シ</sup>天下一<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>教  
文育<sup>シ</sup>金糸<sup>シ</sup>をとつて<sup>シル</sup>  
みもと<sup>シ</sup>勝ちうち<sup>シ</sup>  
せ<sup>シ</sup>とある<sup>シ</sup>とよがい<sup>シ</sup>  
士<sup>シ</sup>峰<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>とよむ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>  
松<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>競<sup>シ</sup>  
名<sup>シ</sup>くらか<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>本<sup>シ</sup>標<sup>シ</sup>  
舞<sup>シ</sup>荒<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>足<sup>シ</sup>男<sup>シ</sup>内<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>  
東<sup>シ</sup>骨<sup>シ</sup>思<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>りゆ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>か  
月<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>憎<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>声<sup>シ</sup>  
老<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>づ<sup>シ</sup>斧<sup>シ</sup>鍔<sup>シ</sup>

院のほどの所の所のあきら  
かをきめふ小町と思ひて  
仕組とくとすへまればうえ  
墨波は女房よりとお葉代  
森みされかず地とある爰  
あよむる骸骨何を其精  
風すよ又切落特乃記  
破くよな葉へ就けむうて  
こぬ歌の様子時を瞬む  
名月れあへ候うくよりて  
金持種ア勒うみとせよ  
兼半書とせ持ぬ奴よたゞん  
すり并うすまやれ 真  
すはめかの名せみくうに  
者と力む卒於第大小  
傳れぬ門とアセよ死比キ  
丸史三百人のまゝ勢  
角

拾遠 南寒一序春と云致不  
久堅やとかれことゆゑ東  
旅を立てをきまひ然喜 並  
信が成す様の庵掃雪て 空角  
すとほきう一瓶ろほ 岩雪  
月晴て灯火赤き海の上、海  
時比度に吹歎のやと 東  
ば絶口被拂せて相おなる  
友位あつて英女石被せり  
松灯玉大爐焰はるりす  
山もこやうさまの物本  
毛皮と空とをもせば昔  
仇人のあくからまで兵を待  
何と身とも葉落葉共 雪  
帝送る八重山の太刀を  
軍れか滅うときもかひ  
去ほとふんよそすぬ月もむじ  
洋生へ見て眼夷の懐合

二四  
立雪に湯を浴ふはうり之  
小姓はすく華れの中 雪 菊 木  
丁寧もゆふうとしき杖袋  
姿ものとそし次第の詰詮  
亥年守ち持うれおもと  
たちそれやせ一休の身を  
冥かくすむ拾食すめふお揃え  
毛體をしき事西のゆり  
ももゆき底の下よ十葉が  
日を仰て辭さうと角  
きくへははおまき花  
莖たくすき角の難民  
前ともあひの邊乃に附  
河川又復ぬくーの立松  
縋きて架木よ喰るせりうき  
拾ふる煮めけてモモー

三日月日記 和漢

破風<sup>ハ</sup>ノヨ日影<sup>ヤ</sup>ヨリタキミス  
煮<sup>ハ</sup>茶<sup>ヲ</sup>繩<sup>ヲ</sup>避<sup>ハ</sup>烟<sup>ヲ</sup>

合歡醒馬上

かきれる小田代水落<sup>カ</sup>めり

月代見金氣

露繁<sup>サ</sup>漆<sup>フ</sup>玉涎<sup>ヲ</sup>

張旭<sup>ア</sup>ぬかきかく<sup>ア</sup>めせす  
榜<sup>ヲ</sup>古<sup>カ</sup>シ<sup>ム</sup>とく<sup>ル</sup>ひら叶

挈<sup>テ</sup>帝<sup>ヲ</sup>驅<sup>ヘ</sup>倫<sup>ユ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>

あをた都<sup>ヲ</sup>沙<sup>レ</sup>御靈<sup>ヲ</sup>

くろ<sup>ク</sup>の首<sup>ヲ</sup>等<sup>タ</sup>板<sup>の</sup>板<sup>の</sup>

乳<sup>ヲ</sup>のひ<sup>テ</sup>漆<sup>コ</sup>何<sup>モ</sup>更<sup>ム</sup>

舟<sup>ヲ</sup>鑄<sup>フ</sup>風<sup>早</sup>浦<sup>ヲ</sup>

鐘<sup>ヲ</sup>絶<sup>日</sup>高<sup>川</sup>

教<sup>ヲ</sup>う<sup>リ</sup>卑<sup>ニ</sup>高<sup>ニ</sup>使<sup>ミ</sup>て

含<sup>ハ</sup>ナ<sup>シ</sup>け<sup>メ</sup>故<sup>キ</sup>大<sup>ニ</sup>の<sup>氣</sup>

詫<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>三<sup>社</sup>本<sup>ヲ</sup>

韻<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>五<sup>車</sup>填<sup>ム</sup>

花月丈山開<sup>ハ</sup>

涤<sup>ヲ</sup>秋<sup>つく</sup>志<sup>ハ</sup>く<sup>ム</sup>す

剪<sup>ヲ</sup>銀<sup>ヲ</sup>貼<sup>一寸</sup>

眞面<sup>の</sup>の<sup>活</sup>や<sup>エ</sup>を<sup>駆</sup>ん

於日<sup>え</sup>午<sup>改</sup>の<sup>活</sup>を<sup>う</sup>や<sup>ヒ</sup>

風<sup>ヲ</sup>飧<sup>ハ</sup>喉<sup>ヲ</sup>早<sup>乾</sup>

それ<sup>ノ</sup>未<sup>タ</sup>裳<sup>ヲ</sup>脱<sup>ハ</sup>て就<sup>キ</sup>て

内<sup>ハ</sup>火<sup>ノ</sup>身<sup>を</sup>度<sup>シ</sup>の<sup>文</sup>月

霧<sup>ヲ</sup>蘿<sup>ヲ</sup>頬<sup>ヲ</sup>孰<sup>與</sup>

震<sup>ヲ</sup>浦<sup>ヲ</sup>目<sup>ハ</sup>潜<sup>ハ</sup>馬<sup>ヲ</sup>

ぬ<sup>ム</sup>ん<sup>ヌ</sup>そ<sup>モ</sup>お<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>夢<sup>ヲ</sup>

ア<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>汝<sup>ハ</sup>旅<sup>の</sup>殊<sup>ハ</sup>教<sup>ト</sup>旅<sup>ハ</sup>

山<sup>伏</sup>山<sup>平</sup>地<sup>ヲ</sup>

門<sup>番</sup>門<sup>小</sup>天<sup>ヲ</sup>

鷗<sup>ヲ</sup>鶴<sup>ヲ</sup>窺<sup>ハ</sup>水<sup>鉢</sup>

あ<sup>ハ</sup>く<sup>リ</sup>り<sup>て</sup>ゆ<sup>ハ</sup>を<sup>有</sup>す

奥<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>心<sup>の</sup>教<sup>ハ</sup>い<sup>ま</sup>さ<sup>ミ</sup>

臨<sup>ハ</sup>谷<sup>ヲ</sup>伴<sup>ハ</sup>蛙<sup>ヲ</sup>僕<sup>ハ</sup>

## 拾遺

のすれりおろ大暮空の秋 売連  
酒けがとせみ全れ月 細筆  
菊やとあそびきる筆を 菊  
舟を駕け浪とす 沖  
波代をいそぐのれの風  
と作れやまくて仙境に入  
くやと身も重ね上まゆまけ  
いつも初ちれく  
浦町うてもおあはく  
ひしき伊達はえときつけ  
むつみのきくわが聲のうめ  
新かよきひじけ美のうめ  
西かられ花りせだの後の方  
被は下ひく寺へ植代  
小芝院を刃もかくと云ふ  
思ふくすをせ捕うて  
天も炎不毒の破狂月玉絶  
絆のこてふのあくさくゆ

二三  
あく葉じ猫へ却てゆきま  
庵ついのトコまひりええ  
世はやく鳥もあき草はれども  
重輪櫻より山の高  
異浦門の詩れきくとその秋  
かたの音れ鳴くとも月  
菴古へ今よやまけぬくん  
香藝文ア葉うれし中  
系物古迎歌を歌へて  
古川のへよざきをアサレ  
先發エバウゼニケンの松るに  
やまとおもねりて園えす御葉  
やのりく一白の贋み  
内粧よまた筋やあくわん  
ねハナリ入ておふ  
花ハ神ハ裕れを経きて  
れくきひくらみすのす

拾遺

まゝ葉すらね葉をうながさむ  
時を窓へてみたるを山 落

朝杖了りて月の氣消て 雨  
床改め肩を夜うつあり

ゑとせよ本もとす秋の風  
天ト一作 因幡うるが

院を拂ひ残のうけアヤシム  
やよ郭云 天帝のき

美きれ不受不於にむかひ世  
天ト一作 因幡うるが

卷之三

拾遺

麦飯の芽や豆もあれどもん  
めあるのりとちうととくと  
幽美へ残海舟ヨリアヒル  
さりのゆまふらひとも御まの浪  
役くらう今船出やアマツアヒ  
至るもあくつるそらもん  
將面の志をゆわけらせて  
あらかじゆハ右門五左衛門  
まうふひをすつてお尋ねらさん  
販アリ不第も軍やふせで  
耶の月桂町アリて萬のよ  
はあとおひきアモ夜衣アモ  
玄男もおひきアモ歎文アモ  
夥ろ床アリもところしゆ  
庵守をアシムアモ野菜  
きせりのあき天のうく山  
彷ほ振の下あり時もむかひて  
古事記の仲人アリキ  
古事記の仲人アリキ

宿ゆすまづくとん都を 茄  
只そものもる波のあら 時 產  
門庭の枝木や絶のてとん 笹  
ふ季とあら毒みくらひ 茄  
又とくいあらうそと岩根 は  
ちくちく虫出す山れ秋風 去  
かくまたとすくわくと音聲で 波  
油あたくと雪とたとくと は  
漁舟や搖船とけて悔せん は  
亂れ狂ゆくと泊れ夕浪 は  
孤も離もえま生こう は  
とねられへゑとく女と莫被祚 は  
大ほくじはくとく は  
一月ハツのからをうそと は  
ばくらうありし小男の角 は  
数えぬれてあ袖のひびを は  
左ねちを富とくと は  
良 は

## 拾遺

寅や月方に才令の通う町  
友了數あらぬ有板れあ  
新舊妻やニ高がれぬ踏鳴て  
芦の繁くゆるれ疎音の浪  
基外相る小舟きうり  
下男彳きふ布その時  
葉草喰ふくすうう紀  
火徐の絃代の歛を裁て  
あともとく縁喜は山  
隈うの峰う月せ鳴う  
秋をせ布は床の山風ト  
焼鳥の鶯啼あらまれ  
膳をほけれ三位入石  
かと隠て死吸ひむにト  
又空せく世子そあく紀  
考はれ細ら重すを承るん  
龍田乃れくよ傳喜うして  
二

<sup>二</sup>毛櫛を門の角せう徳うと紀  
そよ年更常羅薄舞するト  
破立舞思ふがひ吹くとちよ  
巣ノロク子脱 ふ  
抑入や淀川ヨウの落葉子ト  
織お車その行差の度  
能を支事へ時のねえくて  
履拂うたくゆく所ノホニ  
舟船もろい船のやの幸ま  
組板の月持神乃不ニト  
背北秋ニ子供人の掛船  
舟船もろい船のよつてひだ  
舟船の大入とやハ尼ト  
鬼一ノトハ御経を嘗刻ニ  
在の時ふおとづれ一月  
悲しくせすの玉代の去ト

## 拾遺

又すれ草木飯うま金葉  
荒野味野草一肩傳の雪手  
宿舎甚其聲は強き者渡て信德  
跋あ於夜半りくうけつ  
氣うちこれや月の入ひや  
我燭けーと人窮處し  
ゆ往一やトすち物の御庵本  
百少行せんたまの秋  
施一セとかの神也の行進ハ  
又男う姿が立ちかくわと  
古い相がよをそらら  
つもと化身やと様を並  
詮ひもと見えぬさんきみあ  
詮がよまれて出でるこ日は  
モサユ底の弓の細そ  
料理人市井と立てたる張  
本タラ店の扇沖のそゆ

## 三

佐吉の波テヌスくぬ小刀孤  
孤の娘ね泣きものととく  
もとぞ此御深り袖も渡つて  
持すへて縫ぬけり君  
君すす天のほそしす絆て  
絆の向きく袖とよしよ  
滑川ひりり艾と大せし  
勢う事う利ふどうじゆで  
船比奈の三郎ト一あの月  
おれすつと車のお車へ  
いとと長ててる持の事  
いんむねもとひ時をへるひ  
圓すの事ああす四行  
列てやう一色食の贅養むと嫌  
うひとをゆてこりのうみく  
思ひ川堀越す七日のおあ  
あさや橋あらの跡つそのま

## 拾遺

時をかきとけやせぬ哉あらの雪  
才へこりりとふまむひ武意神  
店娘のさき軒湯とおれ  
とくやかくやまうもま

金

老ちがはれて名跡は月を  
詠そあい達はへうしる  
ウホくうきゆの唐よをもて  
渡ゆのきて後あきかね  
きのよれ源と遊はとまき  
古のねをもひども根根  
親に以東山からへゆ  
京へ渡る新丁の妻  
林幽う色れやくふのくる月  
伏えやうてすばらひ秋の風  
うひとじと亭すみ松のあ  
一生を起る事のあきあが  
きとくまじのよかんして

二四

張ぬきよ於の底己山アラム  
ふづくとおーまさすれ  
お發ニミ名とつむ頂のまれ  
渓をむすべ海、またれり  
着くよしのゆをあき  
あきのゆをあきあ  
又ひづくひてをひ法あが  
いきと遊立底アリむち  
底とほりておゆき月ユ松板  
三里アリヒセ游イお寺  
うけく湯かとお刀のひの木  
吉基の松下くわだらうて  
あやま草と波てゆくらん  
浦御うきおの幕の夕日うけ  
大窓のけーの一二すほと  
ほのう波め控る花のうり  
江戸すよ上りありとせ

卷之三

三八

拾遺  
公升直憲子事之是歲  
庚午

おきおりうややかにまじる一品  
おほきうちて機を拂ひん も  
あそくふとあふ新月 茶  
良きれ皮へ小袖とあひて 晶  
紅白の着心地に碁と抹  
きあがる卵塔の日とく 沢  
やん様とうてお城の 沢 晶  
ぬられぬれとこまで 沢 晶  
上着の衿とつまみに縫  
うきの襟と落すに縫り 沢 晶  
密ま妙よいのちづれまき  
ねほのくわくゆすり起され  
うとせきとせきとせきとせき  
ゆの就よほまて日と宵けさう  
うりがてくめあくまび  
あやかの落書きと歌くう  
揚火消く約清ふたれ 沢 晶

ラ  
まゆのじよ鏡とあり歟  
かくも縁と告ふくる  
院の西に佇み妙人君と率て  
喜義深のとくよ減す  
名の絶好のまや括さん  
月郎とたゞそりの感  
新きゆうじとぞはさむ  
巣と後れ臣ノいさる  
子産へやく糞丸と宝とす  
麗娘も挾れへゆくまゝや  
ト原の三千年と光紀十九  
國北からくとく御出そく  
蓬生と大吉清流東こうか  
宿ねらを画す経歌  
あぢれ弊ふはほを冥さう  
ねり葉とりゆゆゆのよ代  
絶妙のまくら花のほねん  
すまくら花のほねん

さうまろ

まこと名月れ蓼葉向山  
肌寒くこそかうゑ カツ立園  
秋は東のそれ白いも蘿青艸  
ほろく笑ふたれちや  
かはう豆の入るう舟  
さよも一日辟ろなく推  
宿ありと五里程牛の童子  
老ひまきし十客となり  
水仙はさうとぞす御音育  
松純すと盤ありクモ  
登られぬ太内山は后う林  
あそびしと子祝少  
かりと先玉尾をまくら川海  
がみてさへ西りハ一哥  
秋すと細玉化るしろ茄子  
花火と同て墨奈なり  
傾諭と枝のゆう神の月  
瓶のおりくせあると食根

二三

奥蓮寺と云へキ名も醒き  
附本寺中て拂る白面  
お袋の部屋と袖もまき  
沙石と讀て少モ不可思議  
詮多も只云延年院も  
詮多すて又云はくの事  
三つ弱くむかのゆゑも志賀と申  
すとけふとさと押く心合  
布袋と云勧井の化身  
經のうち云三十六年  
仙人よ知るゆゑ秋の月  
そのあくへの本城井  
ひくきのとおりとすわがけ  
山川こえとうねんとす  
死も名うあらか夜を歩  
能くへだうむかのね

## 拾遺 松島獨吟

ねのそれ若庵と本山の序翁

沙子の歌をみてり嫌

几中月夜うつくしきうろひて

月行まれへ清き浦より

陸を阻あくまつは神経栗

せとそ葉山子とおし実む

こうともや陸の國めく汝皆

玉おもろけ坐の後おろすと

一備すこゝまための森ば中

との歌くく消きやくもを

きくふかはづく秋の匂りや

名もあき川を木萱遮れて

つよ立て松とく林とく厚雪

月よ思むとくみ面す

かくすのねハ君のゆわやまう

んれあよそく草坂

死あれり聲きをたの佐野

様弟へとそらきのとだ芝

二

のちの後高麗大友  
ル状よりておほまそからひう  
おひそめへ仕立すうひしたき候て  
文とおせよむすふをあく  
いきさぎとて討きのせえぞと  
あく／＼山を進おろす 冬  
森走す／＼身は／＼身は／＼身は  
記念の袖よつむ 福岡  
る場所の本摺あらねははは  
摺皮を摺り／＼かよ お改  
ねまひ紀貫之／＼すすりて  
お一行り持あア＼＼  
ありすよびすよもや處せた  
音はおほを曉きわやも  
おれ約おのれお片みすうす  
吹雪れ袖とあよみえ  
ね体の冥加と買んよのす  
層厚す／＼あうきたま

## 拾遺

たきづけて雪えよぬう残すが  
ぬゆるたゞ拾て終ぬ差  
ねゆく時うりぬのすがて  
一船白毛はせゆうてねりしろ  
あゆく舟押ほどの秋のれ  
さう山の端ス自れ一る  
きぬくや鳥嘴み重おまつ  
舟乗  
肩やそむく軽くわら様  
家よおひつとも許よあすを  
平版のあはせをとまし  
見て車うす車を若よあ重  
門限の教える人があらを  
波うありの峰の船書  
旅やとて海でく度の船書  
旅の約ありと接つてす自  
うかと連絡よ死のめれる  
唯どもあつて御う笑を

水 船 人 事 因

<sup>二</sup>尼寺代主西風くもとくと  
弱弱あけもんあはれとまく  
えのれのれよもくねくま  
布枕二かくまきうき  
じまく絆く珠とあつふ人盡  
含くこと無くしてほり  
船立れ乍むむきぬあれや  
クふ勢利よか震川のうち  
壁せよひくのれとおは貰  
ほとき時の船つてけ  
月赤の代船をすとすと  
物あく君とおとす船  
い船をゆく歸る者を  
ひひき出へてのうわく約  
あてうてな役つてけた  
船とあひてどうほらぬう  
ほらぬうむよひくのれの屋  
敷れすすむ様ふよき

## 拾遺

雪の朝ハ拂るの霜と飛まよ 游通  
夜風とよもん拂れそめ 寂寂  
お波すか雨よほれ食すて ま  
鶴鳴すとす鶴立のま 雪  
物ひるぬの寒物と拂く身 無水  
火と煙草とさへ吹く秋 有  
うと機知をせぬ而て 案  
お日イヒシキテ殊敷 花  
生殺付えあき人のまやま  
親ノアシタモおもひり  
きのまわき算ふとせぬ御  
母の佛と仮す所用する  
度相ニ白猿の捕とお尋人  
渦りとすやれ沙門のみ  
落すとすやれ沙門のみ  
破れ扇の骨を波あらん

<sup>二</sup>初秋やく情多のけ一きやく  
後うつひてにくじ情多の  
さんとお娘の秋の美一き  
いやきあつづる又深  
角からゆきおれう掛けて  
うをうちえよ白髪がうるむ  
おはよつうあつき楊の霜  
おう月とゆいとす雪  
秋山よし山体のしだる  
それともあくとけし秋の木  
あくとれゆきう城のいはき  
心とけくいふかく秋の  
文まじりうかうか秋の後の上  
ナホコトドいてゆきれ秋の  
波を原を發すと拂一きり  
るうをうく金むく家  
花よ葉二男ユ名紫霞さん  
夷ふらうし銀杏の玉を

七卷之内

伊賀